

令和元年9月24日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03049

研究課題名(和文) ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological study of battlefield tourism in Micronesia: Pacific War site as leisure destination and historical heritage

研究代表者

飯高 伸五 (IITAKA, SHINGO)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：10612567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、太平洋戦争の戦跡が観光産業のなかで娯楽の一部として消費される一方で、戦争当事国および現地社会で歴史遺産として価値付けられている両義的な状況を民族誌的に検討することであった。ミクロネシア地域のパラオ共和国および米領グアムで、戦跡観光の組織形態、戦跡や慰霊碑の観光活用の実態、観光客の観光行動などに関する調査を実施した結果、現地社会では観光施策の強化に呼応して戦跡や慰霊碑の保全および活用に対する関心が高まっていること、戦跡観光の現場ではホストとゲストとガイドの間で知識の循環がみられること、これらの結果として、戦跡のレジャー化とヘリテージ化が節合していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ミクロネシア地域における太平洋戦争の戦跡が、戦後勃興した観光産業のなかで観光資源として消費される一方で、戦争当事国および現地社会によって歴史遺産としても認識されている現実を、特に戦跡観光の現場におけるホストとゲストとガイドの間のコミュニケーションおよび歴史認識の循環に注目しながら検討することを通して、戦跡のレジャー化とヘリテージ化が矛盾することなく同時に進行していることを民族誌的に解明した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：This ethnographic research has investigated the ambivalence surrounding the use of Pacific War battlefields in contemporary tourism in Micronesia. These sites where the physical war occurred have become sites of memory and leisure destinations in the postwar era. The field research conducted in Palau and Guam looked at organization of battlefield tours, practical use of war sites and war memorials, and tourists' behavior at war sites. The result shows that local societies are increasingly concerned about preservation and utilization of these war sites, as a response to the promotion of tourism in general. It also revealed that there is circulation of knowledge about the battlefields among hosts, guests, and tour guides. These factors culminate in the articulation of leisure tour and heritage tour at the Pacific War sites.

研究分野：文化人類学

キーワード：観光 戦争 戦跡 記憶 レジャー ヘリテージ パラオ グアム

1. 研究開始当初の背景

戦後日本では、1960年代後半以降、アジア・太平洋戦争の戦場となった旧統治地域や旧占領地域への慰霊団が組織され、戦没者のための慰霊祭開催や慰霊碑建立が行われてきた。宗教学や人類学の分野で、こうした戦地巡礼は生者と死者の関係を再構築したり、公的記憶を相対化したりする実践として注目された(A. Nishimura 2011 “Battlefield pilgrimage and performative memory” Memory Connection 1(1); 北村毅 2009 『死者たちの戦後誌』)。

同時に、1970年代末以降、日本から海外への団体旅行やハネムーンが隆盛するのと軌を一にして、太平洋戦争の痕跡を埋め立て観光リゾートの整備が進んでいった。社会学や観光学の分野では、戦後日本の経済成長と海外旅行の普及・発展のなかで、旧外地における戦争の記憶の忘却が進んでいったことに注目が集まった(山口誠 2007 『グアムと日本人』; S. Yamashita 2000 “Japanese Encounter with the South” The Contemporary Pacific 12(2))。

本研究では、戦後日本における戦地巡礼を通じた戦争の記憶の想起と、海外旅行のなかの戦争の記憶の忘却とが合流する地点として、現代の戦跡観光に注目した。太平洋戦争に従事した日米の当事者が死去したか高齢化している現代では、戦争を直接体験していない戦後世代を対象に、現地観光の一環として戦跡を訪問するツアーが組織されている。こうした戦跡観光では、太平洋戦争の戦跡が、一方では観光産業のなかで娯楽の一部として消費されつつ(レジャー化)、他方では戦争当事国および現地社会で歴史遺産として認識され、価値付けられる(ヘリテージ化)というような両義的な状況がみられるという予見をたて、研究を構想した。

2. 研究の目的

こうした研究の背景を踏まえて、本研究では、戦争当事国の日米および戦争に巻き込まれた現地社会による、戦争の記憶の想起と忘却の狭間でゆらぎながら、太平洋戦争の戦跡が、どのように意味づけられ、消費されているのかを検討することを目的とした。観光人類学的観点から、ホストとゲストおよびツアーガイドなどの媒介者の絡み合いに注目することによって、レジャー化とヘリテージ化の間を揺れ動く戦跡観光の実態を解明し、文化人類学のほか、観光学や社会学などへの関連分野への学術的な寄与をすることを念頭に置いた。

研究対象としては、太平洋戦争末期に戦場となり、日米の軍人、日本人移住者、現地社会に甚大な被害を出したミクロネシア地域のうち、パラオ諸島およびグアム島を取りあげた。そして、現地社会での情報収集やフィールドワークを通して、実際の戦跡観光のなかで、レジャー化とヘリテージ化がいかに節

合しているのかを民族誌的に解明することとした。実証研究を通して学界に貢献することはもちろん、戦争当事国と現地社会の双方を含めた多角的な観点から戦争の記憶の共約可能性を提起すること、国家としての歴史が浅く、地場産業も限られている現地社会に観光モデルの提示を行うことも念頭に置いた。

具体的に明らかにしようとしたのは、以下の3点であった。

(1) 戦跡のレジャー化

従来、ミクロネシア地域の観光で主流であった日本人観光客に加えて、近年では中国人観光客をはじめ、韓国人観光客や台湾人観光客などのアジア系観光客が目立つようになった。かれらは太平洋戦争の戦跡にはあまり興味を持っていないことが多いが、現地観光の一環として戦跡を訪問することもある。また、日本人観光客も、戦争を直接体験していない戦後世代が主流になった現在、慰霊団が盛んに現地訪問をしていた時代とは異なる態度で、戦争の生々しい記憶を想起することなしに、戦跡に対峙していると予想される。こうした観光客の観光行動を戦跡のレジャー化の極にある営為と捉え、その実態を解明することを意図した。

(2) 戦跡のヘリテージ化

戦争当事国であった日米は、戦後、太平洋戦争の戦場に慰霊碑を建造するなどして、戦跡を遺産として整備してきた。米領や旧アメリカ統治地域には国立歴史公園として整備が進んだところもある。近年では、戦争当事国でなかった現地社会でも、太平洋戦争の戦跡が自分たちの社会の史跡として認識されるようになってきている。この背景には、当該地域で観光施策が強化されていること、戦後70年を契機として改めて太平洋戦争の記憶が喚起されたことなど、近年の動向が与えた影響もあったと考えられる。

本研究では、日米および現地社会による戦跡のヘリテージ化の動向を念頭に置きながら、実際の戦跡観光や博物館展示のなかで、戦跡の遺産としての価値がどのように見いだされているのか、日米および現地社会の行為媒体の間では、価値付けをめぐるコンフリクトがみられるのかどうかなどを解明することを意図した。

(3) レジャー化とヘリテージ化の節合

ミクロネシア地域における実際の観光形態は、上記のような戦跡のレジャー化とヘリテージ化を組み合わせた様々な形態をとっていると考えられる。つまり、かつての戦地巡礼とは違って、戦跡訪問や慰霊を主目的としない観光客が主流となった現在において、太平洋戦争の戦跡は、観光資源としての価値を新たに見いだされ、飼い慣らされつつも、生々しい戦場としての正統性を保持する必

要性も依然として求められている。こうした要請のなかで、戦跡は両義的な性格を付与されているのではないかと予見をたて、そのうえで、現在組織されている一般的な観光ツアーのなかに戦跡訪問がどのように組み込まれているのか、反対に、現在組織されている戦跡観光のなかにレジャーの要素がどのように組み込まれているのかを解明することを意図した。

3. 研究の方法

本研究は、海外での資料収集および現地調査と国内での補足的な文献調査を通じて遂行した。海外での現地調査はパラオ共和国と米領グアムにて実施した。調査にあたっては、観光会社による戦跡観光の組織形態、現地社会における戦跡や慰霊碑に対する認識、観光客の観光行動などに注目し、これらを解明するために、戦跡観光の現場での参与観察のほか、戦跡や慰霊碑および博物館展示に関する動向調査、戦跡観光に関わる様々な行為媒体に対する聞き取り調査によって情報収集を行った。

(1) 戦跡観光の現場での参与観察

パラオ共和国ペリリュー島で長く組織されてきた戦跡めぐりのツアーへの参加、パラオ共和国バベルダオブ島を舞台とした新たな戦跡ツアーへの参加、グアムの国立歴史公園 War in the Pacific National Historical Park の訪問を通じて、ツアーガイドが戦跡についてどのような解説を行っているのか、観光客は現場でどのような観光行動を取っているのかを参与観察した。

(2) 戦跡、慰霊碑、博物館展示の動向調査

戦跡や慰霊碑をめぐる新たな動向を調査した。特に、パラオ共和国では、放置されがちだったバベルダオブ島の戦跡や慰霊碑が整備されるようになってきていることに注目し、管理に当たっている地方政府の取り組みについて情報収集を行った。また、終戦 70 年を契機として博物館展示に新たな動向がないかどうかもあわせて調査した。

(3) 聞き取り調査

ホスト、ゲスト、ツアーガイドなど戦跡観光に関わる行為者に聞き取り調査を行い、戦跡観光がいかに関与されているのか、参加者はどのような目的で参加しているのか、それぞれの行為者の間で戦跡に対する認識や価値付けにはどのような相違があるのかなどを調査した。

4. 研究成果

(1) 2015 年度

パラオ共和国と米領グアムで戦跡観光の実態調査を実施した。パラオでは、従来の研究で注目されてこなかったバベルダオブ島の小規模な戦跡ツアーに参加し、参与観察を

行うとともに、Palau Visitors Authority および Palau Conservation Society で戦跡の保存と活用に関する動向調査を行った。米領グアムでは、戦後日本側の団体が建立した慰霊碑の現状、アメリカ国立歴史公園 War in the Pacific National Historical Park と民間の Pacific War Museum における展示の動向に関する情報収集を行った。

調査の結果、パラオの戦跡観光のなかには、小規模なエコツーリズムと一体化した新たな趣向のものが登場し、レジャー化とヘリテージ化の節合が進んでいくことが予想されること、戦跡の遺産化を巡っては観光業従事者と政府関係者との間で認識の隔りがあることなどが分かった。グアムの事例からは、War in the Pacific National Historical Park ではアメリカ合衆国のほか、アジア諸国からの訪問者がある一方で、日本の団体によって設立されたグアム平和慰霊公苑では日本人以外の訪問者は極めて限定的であるなど、アメリカ中心の戦争の記憶が喚起されていること、同時に現地社会の観点からの戦争の記憶は、観光の現場では部分的にしか喚起されないことなどがわかった。

(2) 2016 年度

パラオ共和国での現地調査においては、ペリリュー島で日本人観光客向けの戦跡めぐりのツアーに参加し、ツアー参加者の観光行動の調査、ツアーガイドへの簡単な聞き取り調査をした。調査の結果、戦後 70 年という節目に相前後して、日米および現地社会で、戦跡に関する関心の高まりが見られること、2015 年の今上天皇の訪問以降、日本人のツアー参加者に若年層の増加もみられることなどがわかった。ツアーガイドは、現地訪問をした元軍人・軍属や戦記物の出版物などを情報源として日本人向けの解説を構成していること、ツアーの随所で戦死者への祈りを取り入れる一方で、観光客を飽きさせない娯楽的要素を取り入れるなど、両義的な性格をツアーに付与していることがわかった。観光行動の特性としては、こうしたツアーの両義性を体現するかのよう、厳かな雰囲気や祈りなどの営為に従事する一方で、戦跡や慰霊碑を背景に、セルフイーや記念写真を撮る観光行動が広く認められ、別日のレジャー観光と合わせて戦跡観光に参加している人が大半であることがわかった。

また、バベルダオブ島における戦跡や慰霊碑の動向を調査した結果、アジア系観光客の増加に伴って、地方政府が戦跡や慰霊碑の保全と維持管理および観光資源化を進め、入場料の徴収が行われるようになってきたこと、この過程で、戦跡や慰霊碑が戦争当事国のみならず、現地社会の文脈のなかにも取り込まれていったこと、パラオの伝統的な遺跡や遺物と並んで、戦跡が遺産と認識されるようになっていくことなどがわかった。

これらの現地調査とあわせて、国際学会

Pacific History Association にて Conflicting Legacy of the Pacific War と題した中間的な成果発表を行い、メラネシア地域などオセアニアの他地域における戦跡観光の動向と比較検討を行い、今後の共同研究の可能性を模索した。

(3)2017 年度

グアムで補足的な調査を実施し、2016 年の太平洋芸術祭地元開催後の動向を念頭に置きながら、チャモロ・ビレッジにおける観光イベント調査、グアム博物館展示の動向分析をおこない、太平洋戦争の記憶の想起や忘却との関連を検討した。ともに戦争の記憶との関連性は希薄であったが、文化政策においては、戦跡に関わる教育活動なども重視されるようになっており、今後の動向が注目される。

その他は、研究成果のとりまとめを中心に行い、研究発表や出版を行った。グアムではアメリカ中心の戦争の記憶が喚起されるなかで、戦跡観光が整備されているが、日本人の観光行動はレジャー中心になっていること、パラオでは観光施策の強化に呼応して、現地社会でも戦跡や慰霊碑の保全および活用に対する関心が高まり、新たな形態の戦跡観光も出てきたこと、ペリリュー島の戦跡観光には、日本の元軍人・軍属らの影響で、かつての戦地巡礼と同じようなナショナルな性格が温存される一方で、新たに娯楽の要素も取り込まれていること、これらの結果として、戦跡観光の現場でレジャー化とヘリテージ化が節合していることなどに注目して、成果のとりまとめを行った。

今後の課題としては、最終年度の調査結果のとりまとめでは十分にできなかった現地社会への還元を進め、関連機関と協同で観光モデルを構築することなどがあげられる。また、戦跡観光の現場においてホストとゲストとガイドの間で知識の循環があることは本研究から見出せたが、その実態についてミクロな観点から相互行為の分析や主体の構築過程の分析を通じて、より実証的に検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- (1) litaka, Shingo (2015) “Remembering Nan'yo from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices” *History and Memory* 27(2): 126-151. (査読有り). DOI: 10.2979/histmemo.27.2.126

〔学会発表〕(計 5 件)

- (1) 飯高伸五「南洋のアサドヤユンタ 戦時体制下パラオにおける鉱山採掘と沖縄人の記憶」沖縄県立芸術大学附属研究所主催

シンポジウム「沖縄の人の移動と未来への展望 島嶼・環境・文化」(2018年3月18日、沖縄県立芸術大学附属研究所にて、招待講演)。

- (2) 飯高伸五「ミクロネシアにおける戦跡観光のアクター分析」東アジア人類学再考研究会(2017年10月28日、中京大学にて)。

- (3) 飯高伸五「杉浦健一による南洋群島島民土地制度調査の検証」日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開(2017年9月27日、神奈川大学日本常民文化研究所にて)。

- (4) litaka, Shingo “Conflicting Legacies of the Pacific War: Misinterpretation between Japanese Ireidan (Spirit-Consoling Tour Group) and Local Micronesians” 22nd Pacific History Association Biennial Conference 2016 (Hyatt Regency Guam, May 21, 2016).

- (5) 飯高伸五「帝国後の混血のゆくえ ミクロネシア「日系人」の越境実践と再生産される親日言説」早稲田大学文化人類学会第17回総会・シンポジウム(2016年1月30日、早稲田大学戸山キャンパスにて、招待講演)。

〔図書〕(計 2 件)

- (1) litaka, Shingo (2018) “Tourism of Darkness and Light: Japanese Commemorative Tourism to Paradise” In Kaul, Adam and Jonathan Skinner (eds.) *Leisure and Death: An Anthropological Tour of Risk, Death, and Dying*. University of Colorado Press, pp.141-160.

- (2) 飯高伸五 (2017)「植民地主義」上水流久彦、太田心平、尾崎孝宏、川口幸大(編)『東アジアで学ぶ文化人類学』昭和堂、pp. 97-112。

解題執筆

- (1) 飯高伸五「高知とミクロネシアの架け橋 森小弁」高知県立美術館・「高知の移民文化発信」プロジェクト(編)『海を渡った高知スピリット』pp.25-26、2016年12月。

アウトリーチ活動

- (1) 飯高伸五「オセアニア島嶼部の世界遺産」平成29年度高知県立大学「高校生のための文化学講座」での講演(受験生を対象とした講演、2017年7月30日)。
- (2) 飯高伸五「オセアニアの歴史と文化から学ぶ」高知県立追手前高校「平成29年度追手前ゼミナール」での講演(高校生を対象とした授業、2017年6月16日)。

(3)飯高伸五「観光の光と影」高知県立丸の内高校『総合的な学習の時間』での講演(高校生を対象とした授業、2015年12月7日)

6. 研究組織

(1)研究代表者

飯高 伸五 (IITAKA, SHINGO)
高知県立大学・文化学部・准教授
研究者番号：10612567

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者